

【希望の根っこ】 第46回

先月2月号の保育園の園庭全体を使った「泥・水・砂あそび」の実践を『希望をつむぐ教育』の実践群の中に位置づけてみると、生活教育実践の根っこ、〈胎芽的社会（オキユペーションズ）〉になっている。

社会に連続させて考えてみると、土木工事・治水工事の原型であり、小学校での流水、雲のでき方などの学びを經由して、自然災害の原理と対策に行き着く。泥や赤土で水が濁ったままである経験は、海の埋め立てがどれほど海を汚すか、リアルに感じる力になる。この土山に、草が生えてくる。あるいは花やイネなど植えてみたくならないか。花を植えることは、吉野実践のアサガオを經由し、花で町おこしをする徳水実践につながる。また、谷保実践の「田んぼ」に連続していく。そのような屋外での作業に疲れたら、屋内で絵を描いたりお話しをしたり、歌を歌ったり、劇をした



り、そしてものをつくつたりの文化活動が展開する。これは和光中学校が行く、〈秋田の生活〉の原型ではないか。俳句がつながると、石川実践になる。自由民権運動の時は、農作業の終わったあとの時間で、ルソーの『民約論』を読み合わせたり、憲法草案を話し合ったりしていた。これは村越実践の

根っこになつていないだろうか。どこからともなく水をせき止める板を持つてくる力は、 ∞ の筆算で、2から8は引けないから、必要なものをどこか別の位に探していく力の根っここの経験ではないだろうか。

可塑性かそせいのある土は完全に思い通りになるわけではなく、そこに法則の理解、工夫、思考が生じる。変える経験は、世界やルール、社会も土のように可塑的で、変えられるものだと信じて育む。それがしなやかでたくましい可塑的なところを育む。デューイ『民主主義と教育』第4章の具体例になつている。（研究部・加藤聡一）